3 一人でも多くの命が助かってほしい 映像と写真で伝える津波と防災

Point > 取組のポイント

［ヒト］
自ら撮影した津波の映像を記録に残す

［着眼点］
防災の大切さを国内外に広く伝える

［連携・協働］
企業、学生、個人が善意でつながる

［持続性］
防災意識高めるため、地道に訴え続ける

Area > エリア
岩手県大船渡市

Player > 取組主体
一般社団法人大船渡津波伝承館

Project > 取組の内容
津波災害の伝承、防災の啓蒙

Profile > 人物

理事長／館長
齊藤賢治
さいとう けんじ

岩手県大船渡市出身。地元菓子メーカー・さいとう製菓株式会社の元専務取締役。震災で叔母を亡くす。2013年3月、「一人でも多くの命が助かってほしい」と自身が撮影した津波の映像などを展示した大船渡津波伝承館を市内に開館。また、語り部として全国各地を駆け回って防災の大切さを訴えている。

津波の脅威を伝える自作の紙芝居に、子どもたちが真剣な眼差しを向ける。

［ヒト］

自ら撮影した津波の映像を記録に残す

「逃げろー!」。突如、大きな声が響き渡った。身振り手振りを交えながら紙芝居をする男性の鬼気迫る表情に、子どもたちが息を飲むように見入っている。これは、一般社団法人大船渡津波伝承館が行っている、津波の脅威と避難の大切さを伝える活動の一幕だ。

こうした紙芝居を含め、大船渡津波伝承館は震災発生当日の2011年3月11日に大船渡市で撮影された、被災の様子をとらえた映像や写真などを展示し、津波の恐怖や防災の重要性を後世につなごうと伝承活動を続けている。映像には、巨大な濁流が建物を次々となぎ倒し、町が跡形もなく飲み込まれていく様子が刻まれている。当時の被災の様子を伝える貴重な資料だ。

「押し寄せる津波の様子を自分で撮影したことが、活動を始めるきっかけになった」。館長の齊藤賢治さんは、伝承活動を始めた経緯をそう話す。震災発生当時、地元の菓子メーカー・さいとう製菓株式会社の専務だった齊藤さんは、高台へ逃れ九死に一生を得た。しかし、陸前高田市に住む叔母を亡くした。

3月13日、齊藤さんは叔母を探しに徒歩で陸前高田市へ向かう。すると、そこにはこの世のものとは思えない悲惨な光景が広がっていた。住宅が粉々に破壊され、道路は瓦礫で埋め尽くされ、ブルーシートで覆われた遺体がそこかしこに横たわっている。

齊藤さんは、「何が何だか状況を理解できなかった。家族に看取られて死ぬのが一番の幸せなはずなのに、誰にも看取られることなく亡くなった人たちのことを思うと、気の毒でならなかった」と当時の心境をこう振り返る。この悲痛な思いが、伝承活動を続ける原動力になっている。

［着眼点］

防災の大切さを国内外に広く伝える

齊藤さんが伝承活動を始める転機となったのは、2011年11月のことだった。東京から30人ほどの経営者やビジネスマンたちが視察に訪れた際、齊藤さんは

津波の恐ろしさや防災の重要性を、映像や写真、紙芝居などで伝える「津波伝承館」が岩手県大船渡市にある。国内外から3万人を超える人たちが訪れ、被災当時の様子を伝える貴重な資料に目を通し、その後自主的に防災活動に取り組む例も生まれている。全国で自然災害が多発する中、防災の必要性を感じられる貴重な場所だ。

自身が撮影した被災の映像とともに、町が津波に飲み込まれていく様子を彼らに話した。すると後日、来訪メンバーの1人だった監査法人トーマツの社員から連絡があり、「あの映像を使って、津波の資料館をやったらどうか」と提案されたという。齊藤さんは「それはいい」と頷いた。

齊藤さんにはもう1つ、伝承館を立ち上げた大きな理由があった。地元紙・岩手日報の報道によると、岩手県内の津波による犠牲者のうち、実に約65%もの人たちがそもそも避難をしなかったり、避難途中であったり、あるいは自宅などに戻る最中に犠牲になったのだという。それを知った齊藤さんには、「しっかり逃げていれば、助かったかもしれない命がある」という思いが強くあったのだ。津波の恐ろしさと防災の重要性を伝え、これから発生するかもしれない災害時に、一人でも多くの命が助かってほしい。齊藤さんはそんな思いから、伝承活動を始めることにした。

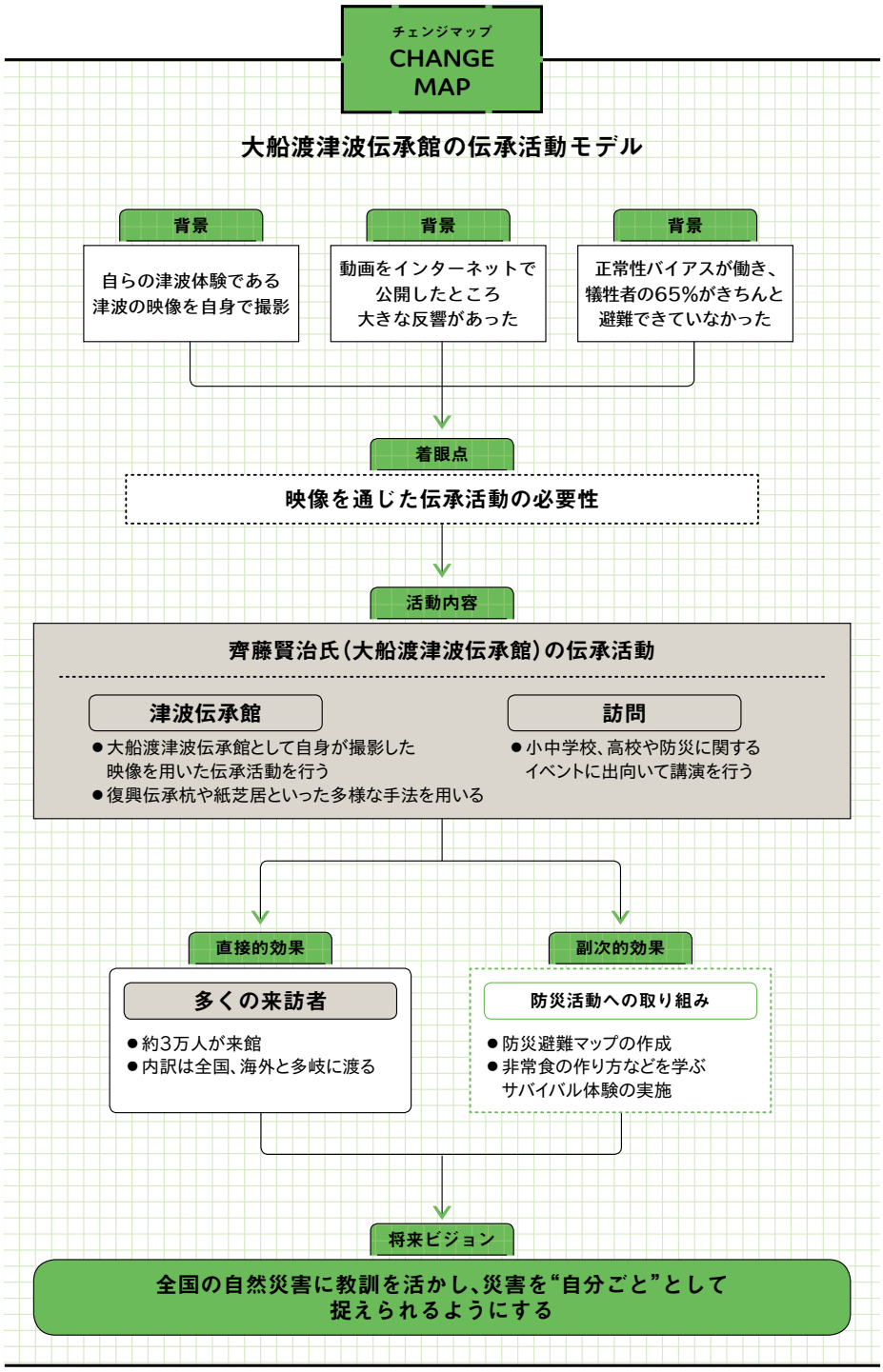
そして、震災からちょうど2年後の2013年3月11日、さいとう製菓株式会社の工場の一角を間借りし、津波襲来時に自身が撮影した映像や、市民などから寄贈してもらった写真を展示する大船渡津波伝承館をオープンした。見学者には齊藤さん自ら、語り部として当時の被災体験も聞かせた。

そんな大船渡津波伝承館には、2018年6月に現在の大船渡市防災観光交流センター内に移転するまでの期間に、約3万人が訪れた。津波の直接的な被害のなかった盛岡市や花巻市、北上市などの県内在住者のほか、南海トラフ巨大地震による津波の襲来が心配される西日本地方など、来訪者は全国各地から訪れた。また、海外からの視察も相次いだ。最初に来訪のあったフィリピンをはじめ、中国や韓国、タイ、ベトナム、台湾、チリ、アメリカなど、その数は総勢1000人ほどに達する。

中には、継続的に訪問するケースもある。例えば、岐阜県の県立多治見北高校の生徒とOB一行だ。「岐阜県には海がないが、だからこそ津波の知識や怖さを知っておくべき」というOBの意向で、毎年20人ほどの生徒とOBがリピート訪問してくれている。

見学者たちは展示を見て、どんな感想

被災の様子を伝える映像や写真は、被害の深刻さを物語る貴重な資料だ。



語り部として、齊藤さんは防災の大切さを各地で訴えている。

トーマツなどと共同で取り組んでいる「復興伝承杭」。

を抱くのだろうか。齊藤さんは、「当時の悲惨さを知って、 かなりショックを受ける人が多い」と話す。「テレビとは違い、こんなにひどい状況だったとは思わなかった」「津波の怖さを痛感した」といった声を耳にすることが多いという。

一方で、齊藤さんは外にも足を運び、積極的に伝承活動を行っている。県内外の小中学校、高校に出向いたり、消防署員や地方自治体の防災担当者に対して定期的に講演を行っているのだ。

実際、齊藤さんたちの映像や紙芝居をはじめとする伝承活動に触れ、自主的に防災活動に取り組む例も生まれている。例えば、大船渡市吉浜地区にある小学校では、生徒たちが防災避難マップを作成する動きがあった。また、市内の別の小学校でも、災害時の非常食の作り方などを学ぶサバイバル生活体験が行われているという。

齊藤さんは、「子どもたちの反応は嬉しい。自然災害は思いもよらないときに起こるものだ。私たちの講演を聞いて、 そうやって防災意識を少しでも高めてもらうことができれば、いざというときに役に立つはずだ」と手応えを口にする。

［連携・協働］

企業、学生、個人が善意でつながる

大船渡津波伝承館は、齊藤さん個人の活動による部分が大きいが、強力な助っ人たちもいる。例えば、冒頭に紹介した紙芝居の演者だ。演じる男性は、大船渡市出身の俳優。以前から伝承館の活動を個人的にサポートしていた人で、法人の理事も務めている。「まるで紙芝居を超えた演劇のようだ」と齊藤さんが話すように、彼の迫真の演技が子どもたちの関心を一気に引きつけているようだ。

実は、伝承館を訪れる子どもたちの反応は、当初は芳しくなかったという。齊藤さんは、「子どもたちに津波の映像を見せて被災体験を語っても、 なかなか集中して聞いてもらえないことが少なくなかった」と話す。そのため、津波が襲ってきた当時の状況などを紙芝居で伝えることにしたのだ。すると、「真剣に見入ってくれることが増えた」（齊藤さん）と子どもたちの目の色が変わったそうだ。

また、伝承館設立のきっかけにもなる一言を発したトーマツの社員とは、その後もアドバイザーのようなかたちで助言をもらったり、一緒に活動するなどしている。その1つが、「復興伝承杭」（通称：みらいんや）プロジェクトだ。これは、市内の津波跡地にICタグやQRコードを埋め込んだ杭を立て、タブレット端末やスマートフォンをかざすと、避難路やその場所の津波襲来直後の様子を写真や動画で見ることができるものだ。トーマツとともに、杭メーカーの株式会社リプロ（東京）と共同で取り組み、市内10カ所ほどに設置している。

トーマツとはこのほかにも、東京・上野で定期的に開催してきた、三陸の魅力や現状、 さらに防災の重要性などを伝えるイベント「三陸なう～あなたに今の三陸を好きになってほしいから～」でも連携。イベントは大船渡津波伝承館が主催、プロデュース・協力がトーマツだ。さらにこのイベントでは、学生のボランティア団体が企画・運営を担うなど、多様な企業、団体と協力して取り組んだ。

また現在は、Yahoo!基金の助成を受け、新しい防災教育ツール「おおふなと津波学習マップ」を開発している。

［持続性］

防災意識高めるため、地道に訴え続ける

震災から8年が経とうとしている。当時の記憶は徐々に薄れつつあるが、齊藤さんは「自然災害に対する心構えを伝えていかなければならない。私が伝承活動を続けることで、一人でも多くの人が助かれば」との思いを今も持ち続けている。

そう齊藤さんが考えるのは、「日本の防災意識はかなり低い」との思いが根強くあるからだ。心理学用語に「正常性バイ

アス」というものがある。社会心理学や災害心理学の分野で用いられる用語で、自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価したりしてしまう人の特性のことを指す。

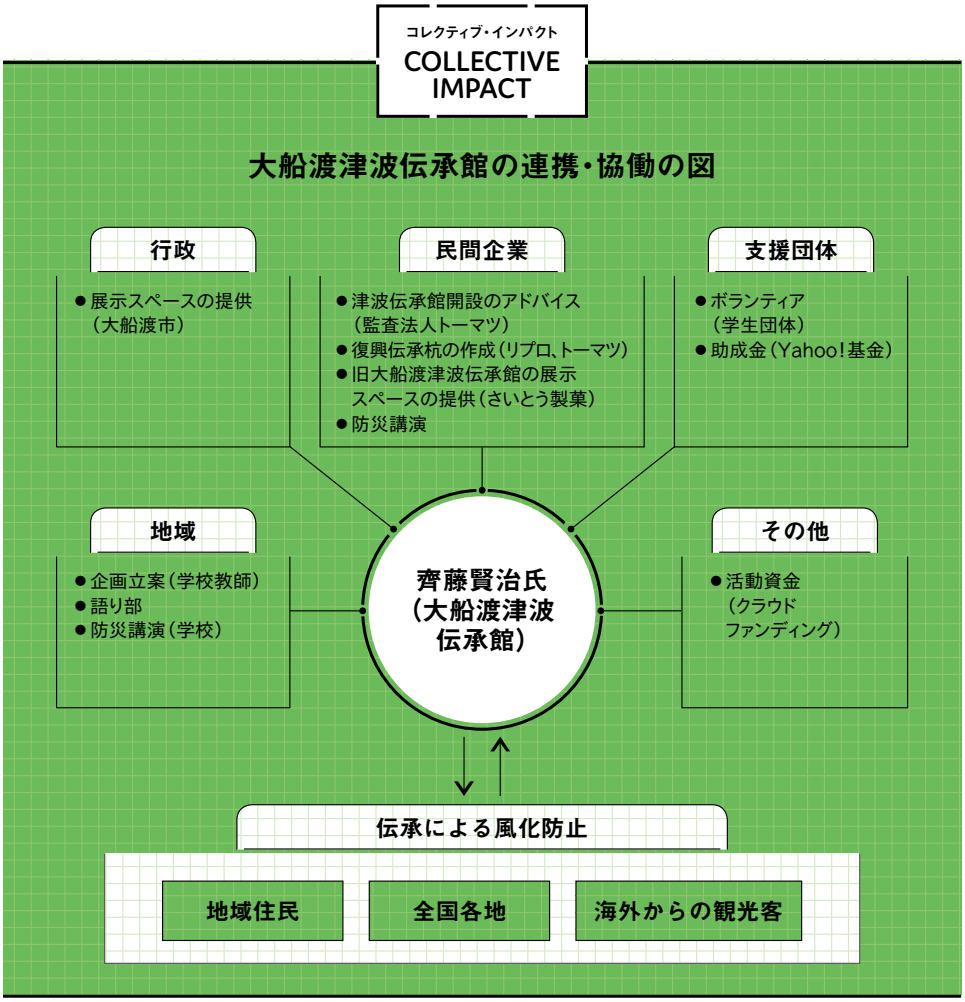
自然災害で避難警報や指示があったり、火事や事故などで自らに何らかの被害が予想される状況下でも、「今までも避難せずに済んだ」「自分は関係ない」「まだ大丈夫」などと自分の都合のいいように解釈し、都合の悪い情報を無視したり危険を過小評価するなどして、逃げ遅れの原因となるケースは少なくない。実際、2017年7月の九州北部豪雨や2018年7月の西日本豪雨などでも、そうした事態を指摘する報道が散見された。

多くの人たちに潜在するそうした意識に、なんとか風穴を開けたい。齊藤さんは、そう強く思っている。「『今まで経験したことがないから、避難しない』といった判断をしてしまうと、大きな犠牲につながるのではないかと危惧している。だからこそ、自然災害に対する心構えの必要性を、多くの人に伝えていかなければならない。」

確かに、齊藤さん自身はすでに高齢の身であり、後継者が育っているわけでもない。日々の活動は来館者が支払う資料代を経費に充てている程度で、決して規模の大きな活動を行っているわけでもないのが現状だ。それでも、齊藤さんは津波被害から得た教訓をこれからも地道に伝えていく考えで、「私の話を聞きたい人がいる間は、全国のどこへでも行くつもり」と力強く語る。

「100年単位で見ると、津波は何度も来ている。今後も津波は必ず来る。実際に起きてしまったときに、『齊藤さんの話を聞いて助かった』という人が少しでもいてくれたら、活動をしてきた甲斐があるということだ。とにかく、津波が来たらしっかり逃げて、助かってほしい。」

東日本大震災の後も、全国各地、また世界各国で自然災害は相次いでいる。少しでも被害を最小限に食い止めるためには、一人ひとりが防災意識を高めることが大切だ。大船渡津波伝承館が果たす役割は、8年経った今も少しも色褪せていない。今、そしてこれからを生きる人たちへ、齊藤さんたちは必死に訴え続ける覚悟だ。



俳優の横道毅さんによる紙芝居は、迫力満点で子どもたちに好評という。

本事例の問い合わせ先

一般社団法人
大船渡津波伝承館

所在地 > 〒022-0002 大船渡市大船渡町字茶屋前7-6（大船渡市防災観光交流センター内）

TEL > 0192-47-4408（事務局）

HP > https://www.ofunato-tsunami-museum.org/

主な事業内容 > 津波災害の伝承、防災の啓蒙活動